

想

苑

想

苑

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会



是よりなるを
 よしうつし世に
 浪荒るるも
 力併せいでゆかむ

はじめに

荊妻（はな）が歿してから一年経った。或る日その遺稿の中から短歌らしいものが見つかった。もとより処女作の域をぬけていないが十五年の思い出の生活記録となればと思った。同時に小生の駄作もまとまっていたので亡妻におくる気持で併せて上梓することを思い立った。いづれも三十一文字の形式をなしているだけで大和ことばの域まで至っていないかもしれない。しかしふたりの思い出の生活記録として、江湖の諸先輩方のご督見をいただければ望外のよろこびとするところである。

昭和五十八年三月

光治しるす

目次

想苑

関口

華

(8
—
38)

心のとしび

関口虹路

(39
—
165)

妻を詠める……………39

秋季演習の思い出……………74

子を想ふ……………49

田端駅助役となる……………80

長女出生……………53

一億一心……………81

胃病む……………55

十和田湖にて……………84

関西紀行……………66

網代青年訓練所にて……………85

見合い……………67

谷川紀行……………90

雑詠……………69

富岳行……………94

農耕にいそしむ……………98

日成寮祭から……………100

浅間山紀行……………104

初飛行の思い出……………107

赤城登山……………112

河原井沼用地買収……………114

五百羅漢……………118

アポロ月に降り起つ……………122

鹿児島にて……………123

皐月考……………128

不動寺出火……………131

馬鈴薯に思ふ……………134

秀之病む……………135

旧家歿落……………138

深大寺に詣づ……………140

助役退任……………142

南伊豆紀行……………143

妻入院す……………146

妻急死す……………148

夢を詠む……………152

足腰の痛み……………153

久喜市史編さん委員……………157

雨がえる……………158

嫁を思ふ……………159

囲碁に親しむ……………161

新盆を迎ふ……………163

感謝……………165

想苑

関口 華

かなしみを誰に打明くすべもなく風に向いて雑草をぬく
わが夫のないたる太き注連縄の灯明の前に神々しく見ゆ
さきがけて新しき年の輝きをしめすが如く元旦の朝
夕靄に霞める空にただ一つ茜に染みて星のまたたき

香華の煙り紫となりて立ちのぼる陽ざし明るき朝の仏間に
きさらぎの空青々と澄みわたり彼方に見ゆる浮雲の群れ

きさらぎとなりて明るし厨辺の小窓の陽ざし少しのびきぬ
たそがれの野面にかかる冬がすみ葱の青鋒のみぞ目立てり
たちかえる春近づきて濡縁の障子をよぎる鳥影のあり

静かなる江面の里のたた住居かかる余生のわれにありとは

日旺に道ぐさ喰って配りいる新聞少年は見れば幼し

雨あがり俄かに忙し心なり庭も畑も雑草のいづ

江面なる里の明暮れなじみきて彼方に眺む男体の山

幼児の泣くその声に訴えを心に知りし友よ母なれ

ひと夜降り小雪まじりの雨はれて今朝青空に白雲の湧く

眼にふれる冬枯れの野はおしなべてみな孤獨なる陰を宿せり

街道に灯は見ゆれども夫まだはや頂天に月は昇りぬ

二荒の社の前の宿木に結ぶ縁よとこしえにあれ

限りなき思いをこめて真白なる猫もふるえる元旦の朝

とことこと湯釜のたぎる音ききつ厨辺にありて年を送りぬ

さし初めし旭日のやがて野にみちて麦の青きにかがやきわたる

ポプラの穂先にゆれて危なげに鋭くかかる冬の月かな

放ちたる犬を追いつつ少年は朝空高く口笛をふく

春立つといえども浅し如月の疎林の中を風吹きぬけぬ

早春の雪消え残りまばらなる林の中を風吹きぬける

厨辺の窓をよぎりし人影に夫を思いてかどに出でみる

六月となりて忙しき畑仕事おそき夕餉の膳にい向ふ

畦道に咲きたる小花紫のひそけき色を手折りみるかな

うつし世は仮りの住居ぞたのしきは蓮の台に夢を託して

春過ぐる如く見えけり山脈に乳色雲の淡く漂ふ

ぬくもりのあまき香りのただよいて夕べ厨に新豆を煮る

静けさの中にひびけり拍手の音のみ冴えて朝の神苑

夫をおくりふと瞬けばゆくりなくも冷たきものの頬を伝えり

新緑の木の上に小鳥あそべるを眺めてしばし心和めり

草引く手しばし休めて麦畑の穂むらのかげにわれは憩いおり

去年の秋壺に秘めたる鈴虫の卵かえるかひげの動く見ゆ

彼岸会の餅つくりおれば朗々と鉢の木謡ふ夫の声冴ゆ

教えたり教えられたり夫と共にお萩をつくるお彼岸の朝

夜ごと降る雨は祈りのごとやさし桜も桃も蕾ふくらむ

雨に濡れ風にも堪えてひっそりと背戸の白梅綻びにけり

春弥生夫の謡ふ鉢の木の声朗々とひとときわ冴える

夕映えの空は茜に輝きて緑の野辺に霞たなびく

霜どけの道もかわきて雨欲しと思ふ朝戸出空晴れわたる

如月の空ゆく雲を指して春ならずやと君にささやく

信濃路を旅する夫を偲びつつ離るる袂今朝は冷たし

夕映えの空に消えゆく鳥のかげおぼろになりて星のまたたく

うららかな師走ま昼のぬくもりに庭の芝生に下芽もえいづ

赤き実を啄みており小春日の柿の梢に鳥はとまりて

群がれる雀の腹は白くしてま冬の夕映赤くそめいる

美しき夕焼空につづく道静かに過ぎし去年をしのびて

吹く風もなしと思えど朝の道に木犀の花あやに散りしく

妹のこと想いてしばし夕なづむ空に去り行く鳥を見送る

雁わたる薄暮の空を仰ぎつつ想いに出でぬ妹のおもかげ

金色と紛ふばかりの茜空山端を染めて入陽かなしも

空蟬に似たる生命にま心の愛の灯をともし夫よ尊し

過ぎ去りし青春の夢よいま一度君が情けに蘇かえりけり

ひとすじに頼る君ありて現世の波荒くともなどかいとわじ

あきらめし花のいのちも火ともゆる君か愛情に灯をともしけり

きよらかな夫の心に魅せられてせざるをえなきわが身なりけり

この身などいかなるとも惜しからじ君に捧げしいのちなりせば

ひとすじに君を頼りて生きぬかむたとえ行手にいばらありとも

宵やみのおぼろ月夜の野の道を夫と並びてそぞろ歩きす

久々の家居にあれば夫と共に畑に出でて若菜摘みする

苗代を覆ふビニールほのぼのとおぼろ月夜の光り宿れり

苗代に湛えし水にほのぼのとおぼろ月夜の墨絵うつれり

木洩陽は緑の色に照り映えて五月の朝の日ざしまばゆし

水田の水面に群れる目高らはわが足音に驚きて散る

勤め路にいく夫は手をあげて青葉のかげに見えずなりけり

勤め路をおおしくいく君の姿見えずなるまで門に見送る

宵月を仰ぎて夫を待ちおれば齢い忘れし胸のときめき